

## 千葉県立海浜病院を受診された患者さんへ

当院では下記の臨床研究を実施しております。

本研究の対象者に該当する可能性のある方で診療情報等を研究目的に利用または提供されることを希望されない場合は、下記の問い合わせ先にお問い合わせ下さい。

研究課題名 (研究番号)	小児深頸部膿瘍形成感染症の疫学的動向解析と治療の標準化を目指すための後方視的多施設共同観察研究 (No. 2024-11)
当院の研究責任者 (所属)	小野 真 (小児科)
他の研究機関および各施設の研究責任者	武蔵野赤十字病院 小児科 長澤 正之 東京北医療センター 小児科 宮井 健太郎 東京都立墨東病院 小児科 大森 多恵 川口市立医療センター 小児科 西岡 正人 草加市立病院 小児科 滝島 茂 東京ベイ・浦安市川医療センター 小児科 鈴木 奈都子 土浦協同病院 小児科 渡辺 章充
本研究の目的	<p>2019年末から始まった新型コロナウイルス・パンデミックは4年間の長期間にわたり全世界の社会経済活動に多大な影響を与え、多数の死亡者を出し、世界的に大きな保健・健康上の問題となりました。その影響はそれ以前の感染症の動向・実態にも多くの影響を及ぼし侵襲性肺炎球菌感染症・侵襲性インフルエンザ桿菌感染症などがそれ以前に比べ6.7割減少したことが報告されています。社会活動の制限緩和などと相まって2023年になると回復の兆候がでてきました。日本の小児におけるRSウイルス感染症などの呼吸器ウイルス感染症も2020年には激減しましたが、2021年からは早くも流行は回復し、アデノウイルス感染症などは2023年には過去10年の中で最大の流行を示し、また2023-2024のインフルエンザの流行期間は例年の3カ月を大きく超え、6か月ほど流行が持続しました。2023年末ごろ今年度にかけて成人領域では、劇症型溶連菌感染症が激増しています。</p> <p>一部の小児科臨床現場においては深頸部膿瘍形成感染症が増える傾向にあり、このことを多施設による後方視的観察研究により検証します。また、単施設では比較的症例の少ない深頸部膿瘍形成感染症の臨床症状や治療内容・経過を多施設の症例を集め、解析・検討し、本疾患の標準的治療の検討を行います。</p>
調査データ 該当機関	2016年1月から2024年7月までの情報を調査対象とします。
研究の方法 (使用する試料等)	<p>対象となる患者さん</p> <p>2016年1月から2024年7月までに咽後膿瘍、扁桃周囲膿瘍、深頸部膿瘍、その他の頸部膿瘍と診断され入院加療を行った15歳以下の小児。診断は、CT検査（造影の有無は問わない）によって膿瘍形成を確認され「咽後膿瘍」「扁桃周囲膿瘍」「深頸部膿瘍」「その他の頸部膿瘍」が確定されたものとします。</p> <p>利用する情報</p> <p>診療カルテから●入院日・退院日、●生年月日、●性別、●入院前抗菌薬投与の有無およびその種類、●抗菌薬（静注・経口）の種類および投薬期間、●CT検査の回数、●穿刺・切開排膿の有無および回数、●培養検査（血液培養・排膿液培養）の有無及び結果、●咽頭溶連菌抗原検査/咽頭培養検査の有無および結果、●入院時の血液検査データ（白血球数・好中球比率・CRP値・D-dimer）、●急性期の緊急気道処置の有無、●急性期のステロイド治療の有無とその内容、●転帰・合併症について、の情報を集めて解析・</p>

	検討を行います。
試料/情報の 他の研究機関への提供 および提供方法	多施設共同研究であり、主研究施設の研究責任者へ電子的配信により提供 します。
個人情報の取り扱い	利用する情報から氏名や住所等の患者さまを直接特定できる個人情報は削 除致します。また、研究成果は学会・論文等で発表を予定していますが、そ の際も患者さまを特定できる個人情報は利用しません。
本研究の資金源 (利益相反)	本研究に関連し開示すべき利益相反関係にある企業等はありません
お問い合わせ先	電話： 043-277-7711 (代表) 担当者：千葉市立海浜病院 小児科 部長 小野 真
備考	なし